

主 題：幸福に降服する 10  
 聖書箇所：マタイの福音書5章11-12節

私たちはいろいろな時に様々な事柄を期待し、また予期します。このような事が起こるのではないかと起こるべきであると、そのような要求を持っているかも知れません。ある人たちに対して、またある物事に対してそのような思いを持って生きるという事があるだろうと思います。その人がこのようにすることは当然である、そのものがこのように働くことは当然であると考えそれを求めるわけです。例えば、今朝私が教会に来るにあたって家を出て車のエンジンをかけました。その時私が期待していることは、この鍵を回すとエンジンがかかるということです。エンジンがかかって教会まで大体20分、30分で着くであろうということを私は期待しているし車に要求している訳です。なぜ、そのような要求をするのでしょうか？なぜ、そのような期待をするのでしょうか？理由ははっきりとしています、車はそういうものだからです。皆さんは今朝礼拝に来られた時に、今日、だれかがこの講壇の後ろに立ってメッセージをするのだろうという期待をもっておられるだろうと思います。それが起こって当然だったろうと思います。だれがここに立つのか、もしかして皆さんは私とは思わなかったかもしれませんが、でもだれかがここに立つことを期待していたわけです。それが当然であると思った訳です。また、今朝皆さんは私がここに立っているのを見て「あー今日の礼拝は10時過ぎるまで終わらないな～」と思われたかもしれません。なぜ、そう思うのかは聞かないことにしますが…。

私たちはキリストにあるクリスチャンとして、同じように、予期されている事、期待されている事、求められている事があります。私たちの人生の中であって、必ず現われていなければいけない特徴というものが存在します。そのことを私たちは、この至福の教えの中から、何週間、何回にも渡って見て来たわけです。最初にこの至福の教えを見初めて来たのは1年ぐらい前になると思いますが、そこから私たちは、クリスチャンはキリストにあり天の御国の国民とされたが故に、自らの罪深さと、そして、神の前に立つ価値のない存在であることをしっかり理解し、それが罪によってもたらされる報いであることを嘆き、私たちがそのように謙遜の中に生きなければいけないということをよく知っているが故に、人々の前に優しさを持ち、義を追い求め、憐れみ深くあり、心のきよさを保ち、そして、人々と平和を結びながら生きて行く者であることを見てきました。これらの特徴は、神が、天国に属する者、神の王国に属する者にとって当然であると思っておられる様々な特徴であつたはずで

前回、私たちがこの箇所を目を向けた時、5章10節を見ました。そこで私たちはもう一つのクリスチャンの特徴を見たわけです。それは「義のために迫害されている」ということです。「クリスチャンは迫害を受けるのだ」ということを見ました。クリスチャンには、義の生涯というものが付随しているが故に、そこには迫害が必ずあるということをイエスは私たちに教えていたのです。事実、この迫害を受けるという部分は、山上の説教の一番の冒頭の部分、この至福の教えのハイライト、クライマックスです。そして、イエスはクリスチャンが持っているこのすばらしい特徴について、教えているのです。実際に、私たちがこの至福の教えを見ると、実はこの教えは10節で終わっています。至福の教えは全部で八つあり、10節でその最後がなされています。けれども、イエスはそこで止まらなかったのです。この後、11節、12節とイエスは付け加えて行きます。私たちはここで非常に興味深いことに気がきます。それは何かと言うと、イエスは3節から10節まで、3人称の呼びかけをしていました。つまり、「このような者は幸いである」と言っている訳です。「私」=1人称、「あなた」=2人称です、そして「これらの者、彼ら」という表現が3人称であるわけです。イエスは3節から10節まで3人称のことばを使って、一般的な原則を話して来られました。天国に属する人たちというのはこういう人たちですよ、こういった特徴を持っているのです、彼らは天国に属するが故に「幸いな人たち」です、とイエスは言い続けて来たのです。

けれども、この11節でイエスはそれを変えます。11節を見ると「あなたがたは」とあります。イエスはここで2人称を使われるのです。イエスはこれまで、一般的な話、一般的な真理を「天国に属する人はこう言った人達ですよ」と話しをしていたのに、この11節では、それが直接的にこのメッセージを聞いている人たちに適用されているのです。特に、この山上の説教の直接的な相手であつた弟子たちに対して、このことをイエスは告げられたのです。「あなたがたは」とそう言ったのです。なぜ、イエスはこのように、3人称から2人称に変えたのか、その細かな理由を具体的に知ることは困難ですが、推測することはできると思います。なぜ、イエスが3人称から2人称に変えて、一般的な事柄から個人的な適用へと、この時点でことばを変えられたのでしょうか？なぜなら、「天国に属する」と言われていた、また、そう考えていたイエスの弟子たちが何を約束されていたか？あなたたちはその人生を生きるにあたって「迫害の生涯を歩む」とそう約束されていたからです。天の御国に属する人たちは「その人生を

通して義を現して行くが故に、彼らの生涯には必ず迫害が伴うのだ」とイエスは言っていたのです。それ故にイエスはこの最後の至福の教え、それをより細かく説明しようとする訳です。イエスの弟子たちはこの迫害の道を行かなければならなかった、そこには恐れが伴うかもしれません。そんなことはしたくないという思いがあるかもしれません。そういったことがないように、イエスは具体的に私たちにこの「迫害」ということについて教えて行こうとされるのです。その中で私たちは、イエスのことばを通して、イエスの弟子たちが、天国に属する者たちが具体的にどのような事柄を予期しないといけ  
ないのか。そして、彼らがそれをどのように受けるべきなのかということをお教へておられます。

今朝は皆さんといっしょに11節を見て行きたいと思ひます。そこでイエスは私たちに、天国に属する者たち、私たちクリスチャンが一体その人生においてどのような事柄を予期していないといけ  
ないのか、どのようなことが起こるかと考えて、どのように生きて行くべきなのかを理解して行かなければ  
ならないのかを教へています。そのことを見て行きたいと思ひます。願わくは、この時間が終わった時に、  
皆さんが「神さまは私の人生にこれを求めておられる」ということが分かり、そして私が、この人生を  
歩いて行くとこのようなことが起こって来るのだということをしつかりと理解して、私たちの日々の生  
活を送ることができるようになってほしいと思ひます。

イエスはこの「義の為に迫害をされている者は幸いです」という、最後の至福の教えを詳しく説明するにあたって、弟子たちが「どのような事柄を予期していないといけ  
ないのか？」ということについて話しをしていきます。確かに、これは12人の弟子たち、多分イエスの周りに座って聞いていたその弟子たちに対して直接に語られたことばです。けれども、それは今生きる私たちにも同じように適用することが  
できることばです。なぜなら、私たちは彼らと同じ様に天の御国に属する者だからです。私たちの  
国籍は天にあるのです。ですから、イエスの、「私たちの主」であるこの方のことばに耳を傾けるべき  
です。ですから、注意深く見て行きましょう。

11節「わたしのために、ののしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたり  
するとき、あなたがたは幸いです。」、ここから二つ、私たちが予期していないといけ  
ない事柄を見ることが  
できます。

## ☆私たちが予期していないといけ ない事柄

### 1. 天の御国に属する者たちはキリストのために生きるべきである

キリストのために生きることが求められている、要求されている、それが当然であるということ  
を私たちはまず初めに知ることが  
できます。イエスは言ひます「わたしのために」と。8番目の至福の教えである10節で「義の  
ために迫害されている者」と言われま  
した。その義のためにということばが11節では「わたしのために」ということばに置き換  
えられています。この「義のために」ということばも、前回見たように、そして「わたしの  
ために」というこのことばも両方とも、何を指しているかと言へば、一体なぜこのよ  
うな迫害が起こるのかというその原因に言及しているのです。なぜ、クリスチャンに迫害  
が起こるのでしょ  
う。それは私たちが義のために生きているからであり、私たちがキリストのために生  
きているから  
です。皆さんに誤解してほしくないことは、私たちはいろいろな迫害と思われることを  
経験します。イエスはすべての迫害が幸いと言っているのではありません。義のために起  
こる迫害は幸いであり、キリストのために起こる迫害は幸いなのです。私たちが人に対して  
優しくなく繊細でなく、  
いろいろな間違  
った事をした時に受ける様々な迫害、侮辱、暴力などは幸いなのではありません。け  
れども、私  
たちが神の前に義の人生を生き、キリストのために生きている時に起こる迫害は幸い  
だと言  
うのです。クリスチャンが受けるべき迫害は、このような義のために起こるものであり、  
キリストのために  
生きるから起こるものであったのです。

10節を見た時、私  
たちはこの「義のため」と訳されていること、それは、私たちが神の民として、天の御  
国に属する者として生きて行く義の生涯のことであると言ひました。すべてのクリス  
チャンにつ  
いて来る、必ずそこに生み出される義の人生というものが、人々に迫害をもたらすの  
です。なぜなら、この義は人々に敵対する、対立するよ  
うなものだからです。この世はこの義を喜ばないから  
です。そして、そのことばが「わたしのために」ということばと置き換  
えられている、そのことを見る時に、私  
たちはこのように結論へと結びつけることができます。つまり、私たちが義の人生を  
生きるということは、私  
たちはこの人生をキリストのために、キリストが歩んだ様に歩んでいるということ  
なのです。パウロはⅡテモテ3:12で「**確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に  
生きようと願う者はみな、迫害を受けま  
す。**」と言ひま  
す。なぜでしょう？そこには義の人生があるから  
です。キリスト・イエスの内に、キ  
リスト・イエスにあって歩む者は、キリストのために生きているが故に、そこには必  
ず迫害があるの  
です。それ故にヨハネは、その手紙の中でこのようなことを言うのを私  
たちは不思議に思  
うべきではありません。Ⅰヨハネ3:7「**子どもたちよ。だれにも惑わされてはい  
けません。義を行なう者は、キリストが正しくあ  
られるのと同じように正しい  
のです。**」、義の人生を歩む者とはど  
のような者でしょう？キリストに似た者  
なのです。キリストが正しい歩みをしたのと同じよ  
うな歩みをしている人たちです。天の御国の真の市

民は、このようにイエスが行われた行動によって、それと同じものがあるが故に特徴づけられています。ある神学者はこのように言いました。「私はイエス・キリストについて告白と、義のない生涯というものとは接点は何一つない。必ず、そこには義が生み出される」と。なぜなら、救われた者、天の御国に属する者はキリストに似た者になるから、必ずそこには義が生み出されるからです。

でも、なぜそのような生涯が求められているのでしょうか？それが起こって当然だと言われるのでしょうか？どうして、天の御国の市民はキリストのために生きる以外の生き方をすることができないのでしょうか？また、するべきではないのでしょうか？その質問に対してロイド・ジョーンズ博士はこのような答えをしています。「クリスチャンが生きて行くその人生の目標はすべて、キリストのために生きるということであり、自分のために生きるということではなくなりました。私たちの人生のすべては、その目標、その目的は、私のために生きるというものから、キリストのために生きるというものへと変わったからだ」と。彼のこのことばは別に新しいことばではありませんでした。パウロは同じことをガラテヤ2：20で語っています。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」、キリストが私のうちに生きているのです。私たちは信仰を持った故に、もうすでに自分自身のために生きることを止めた者たちなのです。むしろ、私たちはキリストを喜ばせるために生きようとする者です。それ故に、クリスチャンの生涯はイエス・キリストによって支配され、イエス・キリストによって統治されているのです。それ故に、クリスチャンの心はイエス・キリストのことばに満ちあふれているのです。イエスはマタイ16：24-25でこのように言われています。「それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。：25いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。」、だれでもわたしについて来たいと思うのなら、自分を捨てなさい、私のためにというもうそのような生き方を止めなさい、自分を十字架につける、簡単に言えば、死になさいということです、自分自身に。もうそれはない者となりなさい、そしてわたしについて来なさいと。いのちを救おうと思う者、自分自身をいつまでも保とうとする人たちはそれを失い、それを喜んで後ろへ置き去って行く人たちはそのいのちを見いだすと。だから、パウロは「私のうちに生きているのは私ではなくてキリストです、十字架につけられたのです。」と言うのです。

神の御国の市民というのは、真の天国民というのは、自分の人生をキリストのために生きる者です。自分自身に死に、キリストとともによみがえさせられた者なのです。それ故に、その人は新しい自分を着て、キリストに似た者となって、義ときよさの道を歩んで行こうとする者なのです。今までの私たちは、私、私、私、…と言っていました。でも、それは終わったのです。何故なら、その自分は死んだのです。だから今私たちは、キリストが、キリストの、キリストを、と言って生きるのです。私たちは神によって買い取られた者です。それに私たちはもはや自分のために生きるのではなくて、神のために生きる者となり、キリストの様に歩む者となったのです。パウロはピリピ1：21で「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」、私にとって生きることはキリストだと言います。クリスチャンの生涯というのは、イエス・キリストということばによって要約されるのです。イエス・キリストこそが私たちが生きている理由なのです。私たちが行くすべてのことはキリストのためにであり、私たちが願うすべてのことはキリストのためであるのです。そこには、私のためにということばはどこにも見つけることはできないのです。

私たちがキリストに似た者として生きるべきであるという、それだけではなく、私はキリストによってあがなわれ、そして、この神のすばらしさを現わすために今存在しているのです。エペソ人への手紙1章にそのことがはっきり記されています。私たちが何のために救われたのか、なぜ、救いの計画にあずかったのか、その目的は私たちが神の栄光を豊かに現わすためだったのです。もし、本当に私たちが神の栄光を現わすために救われ、天の御国に入れられたとするなら、私たちが模範とする人生とはどのようなものでしょう？ 皆さんはイエスがどのような人生を歩まれたかご存じですか？イエスはその人生の終わりに、十字架にかかる前の晩、このように祈られました。ヨハネ17：4「あなたがわたしに行なわせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現わしました。」、イエスはこの地上で義の生涯を送られることによって、神が彼に求めたわざをすべて行うことによって、神の栄光を現わされたのです。確かに現わしました。完全な形で。もし、私たちが本当に神によってあがなわれたその目的をしっかりと理解して、そのために生きたいと思っているなら、私たちが模範とする人生はキリストが歩まれた様にこの地上において神の栄光を完全に現わすことができる人生です。

パウロはこのことをよくまとめています。Ⅱコリント5：15を見てください。「また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」、なぜ、キリストがすべての人のために死なれたのでしょうか？それは、生きている人々がもはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために、つまり、

イエス・キリストのために生きるためだとパウロは言うのです。だから、天の御国に属する者たちが、キリストの生きた人生に沿ってその人生を歩もうとしないということはありません。私たちが天の御国に入れられたのは、私たちが救われたのは、私たちが自分のために生きるのではなく、キリストのために生きるようになるから、なるためです。もし、ここにおられる皆さんが本当に天の御国に入っておられるとするなら、間違いなく、皆さんの人生に現われることは「私はキリストのために生きる」というその強い願望です。私のなすことはキリストのためにするという強い意志です。ときに私たちは失敗します。私たちはときに今でも、私、私、私となります。けれども、その心の奥で何よりも願っていることは「もう私はいません」とそう言って、キリストのために、キリストが生きた様に私は生きたいのですと言う強い願望です。私たちが心から願っていることは、栄光から栄光へと変えられて、いつの日にか完全にこのすばらしいキリストの栄光を受ける者として、その似姿となって神を永遠にほめ称えることではないでしょうか？それ故に、ヨハネは I ヨハネ 3 : 3 で言いました。「**キリストに対するこの望みをいだく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。**」と。イエスは「わたしのために」と言われました。イエス・キリストを信じる者たちの生涯の内に確かに現わされる義、御国の民である者たちの持っている確かなその特徴、それらはこの神の国に属する人たちが「私はもはや私のために生きるのではなくて、キリストのために生きて行くのです」という強い確信の内にその人生を歩むことから生まれて来るものなのです。

神の民はキリストに焦点を当てる、キリストに向かって駆り立てられ、キリストによって支配され、その人生のすべてがキリストによって統べ治められているのです。それが天の御国に属する者たちに求められていること、起こって当然だと言われる生涯です。どうでしょうか？皆さんはそのような人生を生きておられますか？私の何か欲しいからといってそれに向かって人生を歩もうとされていますか？それとも、キリストのすばらしさがこの地上において現わされる様に、皆さんはそのことを求めておられますか？クリスチャンである私たちは、一つ、はっきりと分かっておかなければいけないことがあります。皆さんがもし本当に、私は救われています、私はクリスチャンですと言うなら、私たちは一つのことを間違いなく言えないといけません。それは「もう私は自分のためには生きていません。私はキリストのために生きています。」と。その人生は義の生涯を生み出します。なぜなら、キリストのために生きたら、そこにはキリストの正しさ、キリストのすばらしさ、キリストのきよさ、それらが現わされて行くからです。

## 2. 迫害を受ける

正確に言えば、一番目に求められていることを私たちが実際に生きて行くとき必ず起こること、その結果と言ってもいいでしょう。キリストのために生きて行く天国民であるが故に、その人たちはその人生の内にあつて迫害を受けるのだと言います。このことをよくご存じであったイエスは、弟子たちに対して最後の晩、2階の席にあつてこのように告げられました。「**もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々が私を迫害したなら、あなたがたをも迫害します。もし彼らが私のことばを守ったなら、あなたがたの言葉をも守ります。**」(ヨハネ 15 : 18 - 20)。あなたがたはもうこの世のものではない、わたしが選んでわたしの御国の民へと変えたのだと言っています。だから、この世の人たちはわたしを憎んだようにあなたも憎みます、わたしを迫害したようにあなたも迫害しますと。キリストにあつて敬虔な人生を歩もうとする人たちは迫害を受けるのだとパウロも言いました。いったいなぜ、この迫害が起こるのか？前回、10節で学んだとおりに、ひと言でまとめるなら、私たちが義の生涯を生きて行くと、キリストに似た者となって生きて行くと、世はその義を見て神を憎むが故に私たちをも憎むのです。なぜなら、神の義は世に対立するものだからです。このような迫害は避けることができない、クリスチャンにとつて必然的にもたらされるものです。必ず起こります。ですから、前回見た様に、迫害があるということは確かに私たちが救われていることを確信させる、非常に具体的な証明の一つなのです。もう一度言います、誤解しないでください。あらゆる迫害を受けたから私は天国に属するのだと思わないでください。皆さんがだれかの所に伝道に行って、非常に失礼な態度で伝道したとして、それに対して相手があなたの言うことは聞きたくないですと言った、それで「あ～、私は迫害された。これで天国に属している！」などと思わないでください。なぜ迫害されたのか、あなたが失礼だったからです。神の義を確かに現わして行く時に、神に対して持っている希望が私たちの生涯に満ちあふれて行く時に、それを見て世は私たちを迫害するのです。その時に私たちははっきり言うことができます、「確かに私は天に属するのだ」と。

では、具体的にどのような迫害が私たちにもたらされるのでしょうか？イエスは弟子たちに、また、私たちにも教えておられます。

### (1) 公の場で公然と起こる非難

初めにある「**ののしられる**」ということばは、悪口を言う、とがめる、または、非常に侮辱するなどの意味があります。これらは人々を侮辱し馬鹿にし傷つけるために行われる様々な言動のことです。イエスは確かにこのような侮辱を受けられました。イエスはユダヤ人の議会の前で馬鹿にされ、つばを吐きかけられ、このようなののしりを受けられました。ローマ兵からもイエスは同じような仕打ちを受け、そのようなことを受ける理由が全くないのかかわらず、彼が神の前に正しい人生を送ったが故に、このような迫害を受けた訳です。私達も同じ様にこのような迫害を受けることがあります。私達がキリストに似た生涯を歩んでいる時、私達が神の真理を人々に伝え、その義を確かに生きて行く時に、この世は私達を恥ずかしめようとします。馬鹿にし、私達を侮辱します。私達がそのような公然と起こる様々な非難を受ける時、私達は覚えておかなければなりません。これは受けて当然のものだということ。私達はなぜこんなことを言われたいいけないのか？と思います。何も悪いことをしているわけではない、神の前に正しいことをしているのだから、人々に感謝されることがあっても、どうして馬鹿にされなければいけないのか、侮辱されるのか、傷つけられないといけないのかと考え込むかもしれませんが、よく覚えておいてください、それがあつたら、これは受けて当然なのだ、イエスさまだって受けられたのだからと。なぜ、当然なのか、その理由を考えると私達は喜べるのです。私達が神の前に正しい人生を歩んでいるからです。天国民にふさわしい生涯を送っているから、この世は私達を見て辱めるのです、ののしるのです。私達はキリストのために正しく生きて行く時にこのようなことを受けるとするなら、よく覚えておいてください、私達はキリストの苦しみを分かち合っているのだということ。

### (2) 肉体的な暴力的な迫害

2番目に記されている「**迫害**」ということば、これは文脈の中で3回使われており、非常に強調されていることばです。このことばの持っている意味は、追いかける、追い出す、追求する、弾圧すると訳せるでしょう。具体的な、肉体的な迫害なのです。このような迫害は強調されている理由は、多分、弟子たちがこのような肉体的な迫害を受けるような状況の中にあつたからだろうと思います。事実、キリスト教の歴史を見た時に、このような肉体的迫害を受けた人たちはたくさんいました。それによって死んだ人たちもたくさんいたのです。今日、私達が生きているこの日本の社会にあつて、そこ迄の肉体的な迫害はあまり見ることがないかもしれませんが、けれども、今でも世界の多くの場所でこのような迫害は起こっています。私の友人は、中国の地下教会のその信徒たちの訓練のために働きを続けています。彼から来るニュースレターを読んでいると、ときにこのようなくだりが出て来ます。中国の政府が、その地下教会の教会として使っていた場所のそのオーナーたちを捕まえて、強制収容所に送ったと、印刷機械が全部没収され、そこに居る家族は離ればなれになり、彼らは今すぐくおびえていると、次は、私かもしれない、なぜなら、名前が漏れるかもしれないと思うからです。これは隣の国の話しです。この間アメリカに戻った時に、ある礼拝のメッセージの中でこんな女性の話しが紹介されていました。彼女は今アメリカのマスターズ大学に通っているのですが、元々イスラム教国の出身でした。アメリカに交換留学生で来ていた時に、そのホームステイをしていた家族を通して信仰を持ちました。そして、自分の国に帰って行ったとき、非常に多くに困難がありました。信仰を捨てなさいと言われました。家族から追放すると言われました。そのような状況の中で神の導きによって、もう一度アメリカに来て、大学に入ることができました。マスターズカレッジです。ところがある出来事があつて、一度家に戻らなければならなくなって、休みを利用して家に帰りました。そこにはおじさんが待っていました。そのおじさんは彼女に初めはことばをもってキリストを否定するように、キリスト教を捨てるようにと脅しました。それに対して彼女が「私はそれはしません」と言うと、今度は彼女を殴りました。そして、非常に激しい暴行が何日も続きました。たまたま、彼女の父親(ノン・クリスチャン)がその状況を発見して、何とか彼女を逃がすことに成功しました。今でもそういった事が起こっています。

アベルの時から、義人は常に肉体的暴行、義の故に起こる肉体的暴行を受け続けて来ました。なぜでしょう？神に献身したからです。神の前に正しいことを行なおうとし続けたからです。そして、それはアベルの時から今も何一つ変わっていないのです。確かに、私達はこんなことは起こらないと考えているかもしれませんが、でも、どうでしょう、皆さん？ 私たちの子どもたちが学校に行つて神の前に正しい生き方をした時に、そこでこのような肉体的迫害が起こらないと言い切れますか？今のこの社会を見て…。もしかすると、皆さんはこの社会にあつて神の前に正しい人生を送るとするなら、そこには様々な具体的な形での迫害が待っているかもしれません。それを受ける時にも、私達は思わなければいけません。いじめられている子どもに対して私達は説明をしてあげなければいけません。それはクリスチャンとして受けて当然のことだよ、感謝を持って神さまの力を期待しながら正しい生き方を続けていこうねと…。

### (3) ありもしないことで悪口雑言を言われる

あらゆる傷つけられることばです。1番目も実際にことばで語られるものでしたが、この3番目との大きな違いは、1番目は公けの前で、私たちが聞いている所で起こることでしたが、3番目は私たちの後ろで、私たちの知らない所で起こっていることです。ある意味、公けの前で侮辱されることも辛いですが、私たちの知らない所で様々な傷つけることばを言われることは非常に辛いことです。なぜなら、私たちがその場において「いや、それは違いますよ」と言うことができないからです。それ故に、自分を正しく訴えることができないのです。ユダヤ人たちもイエスに対して何度もこのようなことをしました。何度も何度も様々な悪いうわさを流しました。もし、この世がキリストに対してこのようなことばを語っていたとするならば、彼らはよく言いました、あの人はいつも罪人たちと一緒にいた、だから彼もそんな人物と一緒になんだと…。もし、人々がイエスに対しても同じことを言うなら、イエスに従う者たちに対しても同じことを言うはずで、完全に正しい者として生きられたイエスに対して、彼らはいろいろな偽りを作り出して影で非難したのです。完全に生きていない私たちがいろいろな所でいろいろなことを言われるのは、むしろ、当然かもしれません。このような悪口雑言というのは「ありもしないことば」と付け加えられていますから、彼らはこの非難を捏造するのです。作り上げるのです。そして、私たちがいかにもひどい人物であるかのように教え、また、そのことを広めて行きます。これらは真実でないが故に、非常に受け入れるに難しい事柄であるかもしれません。様々な嫉妬や個人的な好みによって、世の中は私たちに対して様々な悪意をもったことばを投げかけます。そして、キリストに似た者たちは、そのようなことばを受ける側に立っています。けれどもそれは、神の義を私たちが全うして生きているときに受けて当然なものであるということを、私たちは覚えておかなければなりません。

迫害はいろいろな形で私たちの周りにやって来ます。いったい、いつこれらがやって来るのでしょうか？そのことをイエスは「**ありもしないことばで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです**」と言われます。この「時」ということばは、実は、「いつでも」と訳すことができるのです。未来において、いつ起こってもおかしくない事柄に関することなのです。だから、今日、だれもそんなことをしていないからといって、明日、それが無いという保証はどこにもないのです。むしろ、私たちは明日それが起こってもおかしくないと思いながら生きて行くべきなのです。何故なら、今、私たちは義の生涯を歩んでいるはずだから、そこに必ず迫害が伴うからです。私たちは迫害が起こった時に「どうして？」と思うべきではないのです。それは当然だと、むしろ、心構えておくべきなのです。私たちはそのような迫害がやって来るということが約束されている、それが保証されている故に、もしかすると、このように考えるかもしれません。だれでも迫害を受けるのは嫌です。私も迫害されたくないと思います。だから、できるだけ迫害を受けないような人生を送ろうと思うかもしれません。ヤコブはそのような思いを抱く人たちに対して、非常に厳しい警告を与えています。ヤコブ4：4を見てください。「**貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。**」、世の友になりたいならそれは神の敵となっている、それ故に私たちはこの世と調子を合わせるのではなく、私たちの心を、思いを変える必要があったのです。

確かに、迫害というものは私たちが神にぜひ起こしてくださいと願うものではないかもしれませんが。けれども、もし私たちが迫害を受けないために義の生涯を生きないと考えとするなら、そこには非常に厳しい警告があることを忘れてはいけません。イエスはルカの福音書において、同じ山上の説教の中でこのようなことばを語っています。ルカ6：26「**みなの人にほめられるときは、…**」、つまり、この世があなたを賞賛しているときは、「**あなたがたは哀れな者です。彼らの先祖は、にせ預言者たちをそのように扱ったからです。**」と。この世に好かれる、迫害を受けない人生を送りたいと願って、この世と調子を合わせて生きる人たちというのは、神から見ると哀れな人なのです。かわいそうな人なのです。なぜなら、にせ預言者に対してこの世はそういう態度で接したからです。皆さんはどのように自分の人生を生きられますか？キリストに従う者として、天の御国に属する者として、私たちはこの人生をキリストに似た者として、迫害を受けるもの者として生きて行くべき姿というものがああります。それは、天国民にとってしてもしなくても良いことではありません。起こっても起こらなくても良いことではないのです。それに私たちは自分自身の人生を注意深く見つめ、そして、それが本当にキリストに似た者となっているかをよく考えなければいけません。私たちは自分の人生を自分のために生きているのか、キリストのために生きているのかをよく考えなければいけません。キリストが歩んだように私はこの人生を歩んでいるのかどうか、私は本当にキリストのために生きているのかどうか、私は天国民であるということ誇りとして生きているのかどうか…。キリストの御名を守るために、どんな戦いがあってもそこに進んで出て行こうとしているのかどうか、闇に満ちたこの世にあって、キリストの光を放って生きようとしているのかどうか。もし、その答えがイエスであるなら、私はそう願います。そのように生きていますと言う者なら、私たちは迫害を私たちの予定に入れておくべきです。それを受ける準備が皆さんできていますでしょうか？

来週、私たちはどのような態度でこの迫害を受けるべきなのかということを見て行きたいと思います。

なぜなら、それは予定されているから、起こるべきことだからです。でも。覚えておいてください。イエスはこの11節の最後で何と言われたでしょう？そのような「**あなたがたは幸いです**」と。なぜでしょう？私たちは天国に属しているからです。私たちは確かに起こるべきと思っていることが起こらないと残念に思います。私たちは期待している、予想している、求めていることが実際にその通りに起こらないと残念に思います。私たちは神を残念に思わせたいですか？神は皆さんがキリストに似た者として歩むことを求めておられます。「そうである」と言っておられます。それなら、私たちは全身全霊を尽くして、神の御国に属するにふさわしい歩みを、キリストのために生きるべきです。そして、喜びの内に様々な迫害の中、生きて行くべきです。